

上海の現地校で見たアクティブ・ラーニングの実際

前上海日本人学校浦東校教諭

愛媛県四国中央市立土居中学校教諭 篠原 文章

キーワード：現地校、グループワーク、ICT、自己表現

1. はじめに

2018年、OECD（経済協力開発機構）が行っているPISA（学習到達度調査）では、79の参加国・地域において、上海・北京・江蘇・浙江という括りのグループで参加した上海市は「読解力」「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」の全項目において1位となった。それぞれの項目において、日本が504ポイント、527ポイント、529ポイントという結果だった中、上記のグループは555ポイント、591ポイント、590ポイントと日本を大きく引き離す結果であった。その背景には、生徒に学校選択権があることから学校間の競争が激しかったり、世界有数の経済都市であることから優秀な人材が教職に集まりやすかったりすることがあるのかもしれない。

上海市において、基礎教育の学制は日本でいうところの小学校5年、中学校4年、高等学校3年をとっているところが多い。PISAは高等学校1年生にあたる生徒が受検するため、義務教育段階の9年間（9年間の就学期間は日本と同様）での学び方に何か工夫が見られるのではないかと、私は考えた。

3年間の在外教育施設派遣中に、何度か現地校を訪れる機会を得た。そこで見聞したことを中心に、上海市の教育が飛躍している鍵を探りたい。

2. 中国における教育の考え方

藤・福田の論文（2010. 山口大学教育学部附属教育実践総合センター）によると、2001年に中国で発令された「基礎教育課程改革」では、「課程標準」（日本の学習指導要領にあたるもの）が示され、以下のような例が挙げられている。「語文課程標準」では、課外読書量を増やしたり、言語活動を充実したりすることにより語文に関する能力を育成して、文法や修辞、言語の論理性的の難度を下げる。こと。「数学課程標準」では、学習者に日常生活および社会生活における図形と空間、統計と確率に対する興味・関心を起こさせ、計算スピードの要求や算式の繰り返し訓練を緩和すること。「科学課程標準」では、化学と社会技術や生活との関連性などの教科内容を増やし、化学計算式の難度を下げる。こととある。また、体験型学習を積極的に取り入れ、学習者に自ら参加し、自ら実践し、自ら考え、他人とともに協調するよう学習指導を求めるとしている。

現地校の教師との交流会では、次のような話を聞くことができた。日本の佐藤学氏が提唱する学びの共同体を教育改革の1つのモデルとして取り組んでいる学校があることや体験型学習をするために、博物館や美術館、文化施設や歴史的な建造物を訪れる学習を取り入れていること、公立の学校であっても、ほとんど教師の転勤は無いため、学校の教育理念を継続して行うことができること、日々の授業において、探求する場面を多く取り入れたり、芸術的な学習に力を入れることで生徒の感性や創造力を高めたりする取り組みを実践していることである。しかし、放課後に生徒が通う塾によって従来の知識偏重型の教育がなされている現状を憂いていることなどの声を聞いた。一斉型授業から脱却し、生徒自らが学びを深めるアクティブ・ラーニングを実践しようと模索している様子が非常に伝わってきた。

3. 日本におけるアクティブ・ラーニングの定義

2012年に取りまとめられた中央教育審議会答申には、アクティブ・ラーニングについて次のような記述が見られ

る。「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への変換が必要である」また、2017年公示の学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」という表現で、授業改善の必要性が示されている。

4. 実際の授業を見聞して

(1) 現地校の授業における工夫点

3年間で、小学校から高等学校までそれぞれの年代の授業を参観することができた。また、教科についてもいくつかの授業を参観できた。共通して感じた授業の工夫点は、次の3つである。

- ・グループワークを効果的に取り入れ、協同的な学びを行っていた。
- ・ICTを効果的に活用し、生徒の理解を促したり、生徒がプレゼンテーションを行いやすいようにしたりする工夫が見られた。
- ・答えが1つではない問いを教師が投げかけ、生徒が自分なりの表現をするという場面を多くつくろうとしていた。

次の節では、実際に見聞した授業について紹介したい。

(2) 授業の実際

① 外国語の授業において

ア 小学校低学年の授業において

本時のキーセンテンスの練習をする際に実際の生活の場面がシミュレーションされていること、児童一人ひとりが自分の興味や感情を既習の単語を用いて自由に表現することなどを大切にされた授業が展開されていた。

また、みんなの前で表現する機会を授業の中に多く設けることで、外国語を積極的に話そうとする姿勢を育てることができていると感じた。また、ICTを効果的に用いており、教師が独自に作成したプレゼンテーションで児童に興味を持たせつつ、教科書に準拠したプレゼンテーションを組み合わせ、ネイティブスピーカーの発音や英語圏内の文化も感じ取らせることができていた。教師は、児童たちへの指示もほぼ英語を用いて行っており、児童もほとんどのものが理解できているようだった。中国の外国語指導は発音を非常に大切に考えているようであり、児童の発音に対して教師が注意を促す場面が多く見られた。授業後の交流会では、通常の公立小学校ではあるが、ほとんどの児童が就学前から英語を習ったり、家庭で積極的に英語に触れたりしているという話を聞いた。学習の積み重ねの中で、自信を持って学級の中で自分を表現することができていたり、教材研究を含めた教師の工夫が多く見られたりすることが、児童の力を十分に引き出していると感じた。

イ 中学校の授業において

授業は、英語の歌を歌うことから始まった。スクリーンに歌詞が映されていたため、生徒が顔を上げて歌うことができていた。また、自己を表現することを各教科で繰り返し行っているからか、大きな声で歌うことができており、思春期の時期によく見られる控えめな様子はほとんど見られなかった。グループワークが、生徒の理解を深めたり、表現の場を設けたりすることに大きくつながっていると感じた。文法事項の確認を生徒同士で行い、ワークシートを協力し合っている様子が見られ、



一人ひとりの理解を深めることにつながっていた。既習の文法を用いた会話練習も、生徒が場面をしっかりとイメージした上で、生徒同士で行うことができていた。生徒対生徒の場面を多く持つことで、英語を話す機会を増やすことができていた。授業の導入やデジタル教科書の活用においては、ICTが効果的に用いられており、生徒の興味関心を引きつける効果が非常にあったと感じた。

ウ 高等学校の授業において

授業の前半はデジタル教科書を用いて本文の読解が行われていた。教師がPC上に書き込みをすることで生徒の理解を深めることができていた。拡大や縮小も簡単に行えることから、ポイントをしばった指導がしやすいと感じた。授業の後半は、与えられたテーマを基に小グループでグループワークが行われ、代表者によるプレゼンテーションまでの流れを生徒主導で行っていた。プレゼンテーションもICTを活用して行っており、分かりやすいものだった。事前に家庭で調べてきたことを基に、グループワークが進められたり、プレゼンテーションが作成されたりしており、協同的な学習による深い学びや自己表現力を高める場が設けられていた。

②音楽の授業において

ア 中学校の授業において

クラシックの曲に合わせて、生徒が自分なりに曲を解釈した上で指揮をするという授業が展開されていた。中国の課程標準では、指揮を実際に行う授業は必修ではないが、音楽を表現する方法の1つとして指揮があることを生徒に知ってもらいたいことや同じ曲を聴いてもその解釈は人それぞれであり多様な表現ができることに気付いてほしいとの思いから、この授業に取りこんでいるとの説明が授業者からあった。この授業でも、ICTがいくつかの場面で効果的に用いられていた。授業の導入で歌うためのウォーミングアップで動画を見ながら行ったり、有名なオーケストラの指揮者の様子を動画で見たりしてイメージを膨らませていた。小グループで指揮を見合ったり、全体の場で自分の指揮を披露したり、教師のピアノ伴奏に合わせて一斉に各々が指揮をしたりするなど、テンポ良く授業が展開されていた。

教師が、全体に指揮を披露したい生徒を募った時に多くの生徒が挙手をしていたことから、中国の生徒の積極性を感じた。他校の他の教科の授業でも感じたことだが、授業に能動的に参加しようとする生徒が日本の中学校や日本人学校よりも多くいるように思う。自己表現することに喜びを感じながら、学びを深めている姿が見て取れた。

1時間の授業の組立が非常に上手く、授業を参観していた私たちも思わず腕を振りたくくなるような気持ちになった。授業終了時の生徒の表情が非常に晴れ晴れとしていたこともさることながら、授業後に自分なりの指揮を見てもらおうと担当教師のそばに寄っていく生徒が何人もいたことが印象的だった。芸術的な学習が、生徒の意欲を高めたり、感性を磨いたりすることにつながっていると実感した授業であった。



③理科の授業において

ア 中学校の授業において

物理分野の力学の授業を参観した。授業の導入では、既習事項の振り返りと本時の学習のねらいを確認するために全員が前を向いて落ち着いた態度で、教師の話に耳を傾けていた。その後は、4人程度のグループで実験が行われていた。どのグループにおいても、一人ひとりが自分の役割を考えながら実験を進めたり、互いに相談しやすい雰囲気が醸成されたりしていた。教師は、全体を見渡したり、グループの中に入って助言をしたりする役割に徹していた。アクティブ・ラーニングにおいて教師は、ファシリテーターとしての役割が求めら

れるが、それを具現化した授業であった。力学は、概念的な部分が理解しづらい分野ではあるが、グループワークが個々の理解を効果的に促していると感じることのできる授業展開であった。

5. おわりに

2019年度、上海日本人学校浦東校では「主体的・対話的で深い学び」の「深い学び」の部分に焦点を当てて研究を行った。私も校内研修において、社会科公民的分野の選挙への参加の単元で研究授業を行ったが、「深い学び」につなげる生徒の深い思考を促す授業展開の困難さに直面した。そんな中でも、教師が想定していなかった角度からの考えを発言する生徒がおり、その考えを小集団や学級で共有していくことが深い学びにつながるのではないかと気付かされた。また、この授業ではICTの効果的な活用もテーマの1つに取り組み、従来のホワイトボードに記入して発表する方法から、タブレット端末を活用し、それをプレゼンテーションする方法に取り組んだ。生徒が書き込める文字数の多さやスクリーンに大きく映し出して見ることができることから、その可能性を感じることができた。

私自身は参観できなかった現地校の国語の授業では、自分のお気に入りの風景をタブレット端末で撮影してきて、授業中にその写真に詩を付け、発表する取り組みがあったらしく、参観した同僚はその授業の素晴らしさを私にも伝えてくれた。課題の提出にSNSを用いて音声や文字でさせたりするなど、ICTの活用についても非常に工夫をしていることが感じられた。コロナ禍において、日本でもICTの本格的な活用を様々な学校で模索しているが、そのヒントとなる授業を多く見させていただいたように思う。

私自身の授業展開の反省として、一部の活発な生徒によって授業に盛り上がり生まれることはあるが、全員が意欲的に授業に参加しているという状況になかなかもっていけないことがある。誰もが安心して、自己表現ができたり、学びたいという意欲を更に高めたりする場を創造していくことが教師の一番の務めであると感じている。中国の学校の日常を通して見たわけではないので、手放して上海の教育は素晴らしいと結論づけることはできないが、日本の教育であったり、私自身の授業に還元できたりする部分は少なからずあるように思う。

在外教育施設に派遣していただき、多くの刺激を受けた。それは、現地校の参観だけでなく、同僚の教師の教育実践を日々、目の当たりにすることができたことである。生徒を伸ばしていきたいという思いほどの派遣教師からも感じる事ができた。手法の違いを感じることも多くあったが、自分の視野を広げることにつながったと思う。アクティブ・ラーニングとは、教師自身が自ら学ぶことを実践するところがスタートラインである。この貴重な経験を基に、これからも学ぶこと、挑戦することを継続していきたい。

【参考文献】

福田隆眞、藤、雪麗 「小学校における中国の課程標準と日本の学習指導要領の比較研究：中国義務教育改革目標の6項目を中心に」教育実践総合センター研究紀要 巻：30号
山口大学教育学部附属教育実践総合センター 2010